

コミック版

## 『蟹工船』

或る書評職人の眼

波那

「おい、地獄さ行（え）ぐんだで！」

のっけから意表を突いてくるセリフ。新潮社のコミック版『蟹工船』だ。2008年刊。黒とオレンジの表紙は、角張ったレタリングの題字がレトロで格好いいけれど、どこことなく禍々しい予感。

二年前にロスジェネ世代の過酷な現実の一端が書かれているという指摘や「格差」についての大議論が起こっていたのが懐かしい。その熱さが醒めたころ敢えていま漫画で「入門」というわけである。

展開されるのは函館から出港間近の蟹工船「博光丸」の乗船風景。冒頭の一言はそれを眺めている東京の学生に語られた言葉だ。本土各地から周旋屋（仕事をあっせんするブローカー）に集められてきた貧しい少年たちや季節労働者たちが、乗り込み、蟹を獲り、加工する仕事に従事するための「職場」。しかしすぐに、そこがおよそマトモじゃないことが分かってくる…。

《蟹工船》は、けっしてフィクションではなく実際に存在していた「工場船」。北海道沖カムサッカ（現ロシア領カムチャッカ半島）に向けて出港する時点ですでに老朽化の酷い転用船でもある。さらにそれらは「船舶」でなく、「工場」でもないという、当時の法律（工場法と航海法）の隙間を巧みに利用したある種の無法地帯でもあった。

今迄残酷極まる労働で搾り抜かれていた事がかえって其の為には

此上ない良い基盤だった——！

一旦この気持ちをつかむと不意に懐中電燈を差しつけられたように

自分達の蛆虫そのままの生活がアリアリと見えてきた！

《新潮社版》には一人の「東京の学生」が語り手として存在している。ヒーローでもイケメンでもなく一見無力そうな彼の表情や言葉を通して見えてくるのは、「知る」「気づく」ことが常に、人が変わっていくための岐路を生み出していくという事。同時に、彼のもの静かな「気づき」は、現時代の読み手にとって、遠くかけ離れたモチーフに繰り広げられるストーリーを読み解いていく為の、道標としての役割も担っている。

例えば、ロシアに拿捕・抑留されてのち戻った仲間の中にいつしか深く浸透している「赤化（搾取る側に対立する労働者という階級思想）」に、あるいは自分たち蟹工船団を護衛する駆逐艦の真の意図に、「気づいて」ゆく。一方で、同船者から聴く津々浦々の過酷な労働体験に、それまで学生という身分では触れることのなかった社会の歪みを「知って」いく。

末尾の解説によれば、作者の意図もあえて群衆の誰かを突出させず、その構造を細かに印象的に描くことを意図していたことが分かる。同じ小林多喜二の前後

の作品や、同時代の作品群に比べて、なぜ『蟹工船』だけが突出して読み直されているのか、その辺にヒントがあるのかもしれない。

法と法の隙間に落ちている場所、法が機能しない場所。そしてそこに生きる人々…。生き残る為の企業の経済活動の裏、「自己責任」もあるにせよ、それをのみ原因として語ることで却って見えなくなっている世の中のシステムの綻び。

この△構造▽は、見えていなかった（見ようとしていなかった）だけで、今なお、形を変え、ここに存在しているのだと気づくのに『蟹工船』は恰好のテキストだった。

（もちろん共産主義や組織化、団結化だけが唯一の正しいコタエじゃないが。）

知らぬが仏だったのか、知ってよかったのか…。多分後者だろう。ちょっと間違えば知らぬは地獄だったかもしれないのだから。

付け加えると、著作権の消失にともない、原作『蟹工船』のマンガ化版は既に数社から刊行されている。イースト・プレス版では、労働者側の「森本（森）」をイケメンの正義漢に、対する作業監督「浅川」は極悪非道の悪党面に描き分けている。この両者の対立を浮き立たせることで、正義への悪をよりわかりやすく表現している。どちらがよいかはお好み次第。もし、お時間が許せば、原作もまじえ読み比べていただくのも面白いと思う。



蟹工船  
(Bunch Comics Extra)  
<新潮社 刊>  
¥620 (税込)



まんがで読破『蟹工船』  
<イースト・プレス 刊>  
¥580 (税込)

波那 (はな)

静岡県在住。夫十子ども2人の4人暮らし。

ネット書評家・五行歌人

2008年オンライン書店ビーケーワンに  
wildflower名義で書評を書き始める。

2009年5月9日「書評の鉄人」

2009年10月16日「書評の鉄人列伝195回」

<http://www.bk1.jp/contents/shohyou/retuden195>

2010年3月9日通算書評数200本達成。

隔月刊誌『グランパピエ』に書評の連載中

本を読むだけでなく、  
読んであげるだけでもなく  
何か、もっと先へ。  
そう思って始めました。  
食事と同じく、  
読書は私たちの栄養に  
なってゆくもの。  
私の評は、その美味しさの  
一滴をお伝えするために  
在ります